【ツーリングレポート】

平戸一周キャンプツーリング

平戸の自然と歴史・文化を辿る海道の旅

長崎県北部に位置する南北35㎞、東西10㎞の平戸島は、平戸大橋で九州本土とつながり、福岡からも2時間半でアクセスが可能だ。海蝕崖や柱状節理が発達した、急傾地の特異な景観は西海国立公園に指定され、南蛮貿易発祥の地として古くから大陸との架け橋となった地でもある。オランダから台湾を解放し、清朝と戦った中華民族の英雄・鄭成功は平戸出身である。漁業も盛んで、捕鯨集団・益富組はかつて日本一の捕鯨組として名を馳せた。フランシスコ・ザビエルが3度にわたって布教に訪れ、今も島民の多くがカトリックを信仰し、教会が海に向かって建っている。
このレポートは、2011年春からシーカヤックをはじめた小関のトレーニングと、ガイド同士の懇親と連携を深める目的で、佐世保のシーカヤックガイドサービス「ブルーコーン」の林田、川後、江藤の合計5名で、平戸島を一周した海旅の記録である。

文＝末永直樹（平戸カヤックス＝http://www.hiradokayaks.com/）
写真＝中倉壮志朗、末永直樹

01 ｜前日から宿泊していたブルーコーンの林田、川後、江藤と平戸カヤックスの小関。**02** ｜手作りの平戸カヤックスだが、この屋根付のデッキは大工さんとの共同作業。**03** ｜中華民族の英雄「鄭成功」は、1624年7月平戸に生まれる。母である日本人の田川マツが海岸で貝を拾っている際に、産気づいてそのままこの海岸で生まれたといわれている。**04** ｜小関はシーカヤックを始めて数カ月だが、ロールを練習の一発目から成功。サザンオーロラを漕ぐ。**05** ｜ブルーコーン代表の林田氏はJRCAの理事。多忙な日々を過ごしている。**06** ｜海岸に生える山菜ツルナ。みそ汁に入れて食べるとおいしい。**07** ｜初日の幕営地この浜は、私が山ガイド（登山教室モルゲン）としてしばしば山菜ハイクを実施。**08** ｜猟師であり調理人でもある小関。今夜の食事は彼がさばいた猪の焼肉。**09** ｜シーカヤックのキャンプは、なんといっても焚火料理。**10** ｜平戸を漕いでいると、たびたびイノシシが海岸に打ち上げられているのを見かける。**11** ｜平戸島南東部沿岸の山肌はかなり崩壊している。上陸時は注意が必要。**12** ｜平戸南部の志々岐山は、古くから航海の目標となっている。**13** ｜尾上島を背景に漕ぐ小関。尾上島は1966年当時、世界最大の太陽電池が設置された灯台だ。

11月5日。「ブルーコーン」の3名は、「平戸カヤックス」の更衣室兼簡易宿泊所で前泊。平戸カヤックスは、平戸島の北東部に位置する千里ケ浜の一角にある。近くには、海水浴場、ホテル、乗馬倶楽部、レストラン、そして中華民族の英雄「鄭成功」の児誕石がある。末永が主宰している登山ガイドサービス「登山教室モルゲン」とともに、主たる事務所は佐世保市にあるが、艇庫内に従たる事務所兼宿泊所を置き、夏場のハイシーズンの1カ月間は艇庫で過ごしている。

今回は、参加者の都合上、4泊5日で実施したが、本来のツアーでは約100㎞を6泊7日で漕ぐ。

【千里ケ浜〜上段の野・24㎞】

11月6日。朝5時30分、平戸の小関が集合して全員で朝食。小関は料理人で猟師だ。平戸カヤックスのスタッフには、なぜか料理人が多く、ツアーの時などはいろいろと助かっている。艇庫はほとんどが手作りだが、さすがにウッドデッキは大工さんとの共同作業だ。

シーカヤック・キャンプツアーの場合、焚き火をおこし、食事を済ませ、幕営用具を片付けて出発するまで3時間というのが私なりの目安だ。山の場合は2時間というところだ。少し時間がかかりすぎのようだが、のんびりと食事をすませ、準備をしながら身体を覚醒させていくには適度な時間だと思っている。

ブルーコーンの3名には、千里ケ浜からカヤックを出艇していただいた。平戸カヤックスには1台分の駐車スペースしかなく、近くに浜を利用する乗馬倶楽部があるため、自艇を使うお客様には千里ケ浜からの出艇をお願いしている。夏は海水浴場になって、駐車場もトイレもあり快適だ。小関と末永は艇庫前の浜から出艇。

とりあえず今日の目的地は特に定めず、海況とメンバーの状況を見て臨機応変に対応する。平戸でシーカヤックガイドをはじめる前に、海岸線を津々浦々巡ったので、どこで水を補給できるか、どこで幕営できるかはあらかた把握している。

初日は東海岸の千里ケ浜から時計周りに、北風3〜5m／秒の追い風に乗って南下。1時間ほどでキャンプツアーを行なっている木ケ津沖の野島に到着。小関が浜辺の山菜を説明してくれる。ツルナやボタンボウフウ（長命草）などは、どこの海岸でも生えている山菜なのだろうけれど、知識がなければ活用することはできない。

追い風を受けて順調に南下を続け、15時には毎年2月に野焼きされている上段の野の海岸に到着。途中、何度か休憩しながら5時間で24㎞を進んだ。追い風に感謝。しかし、明日からの平戸島西海岸は、その追い風が向かい風に変わることになる。

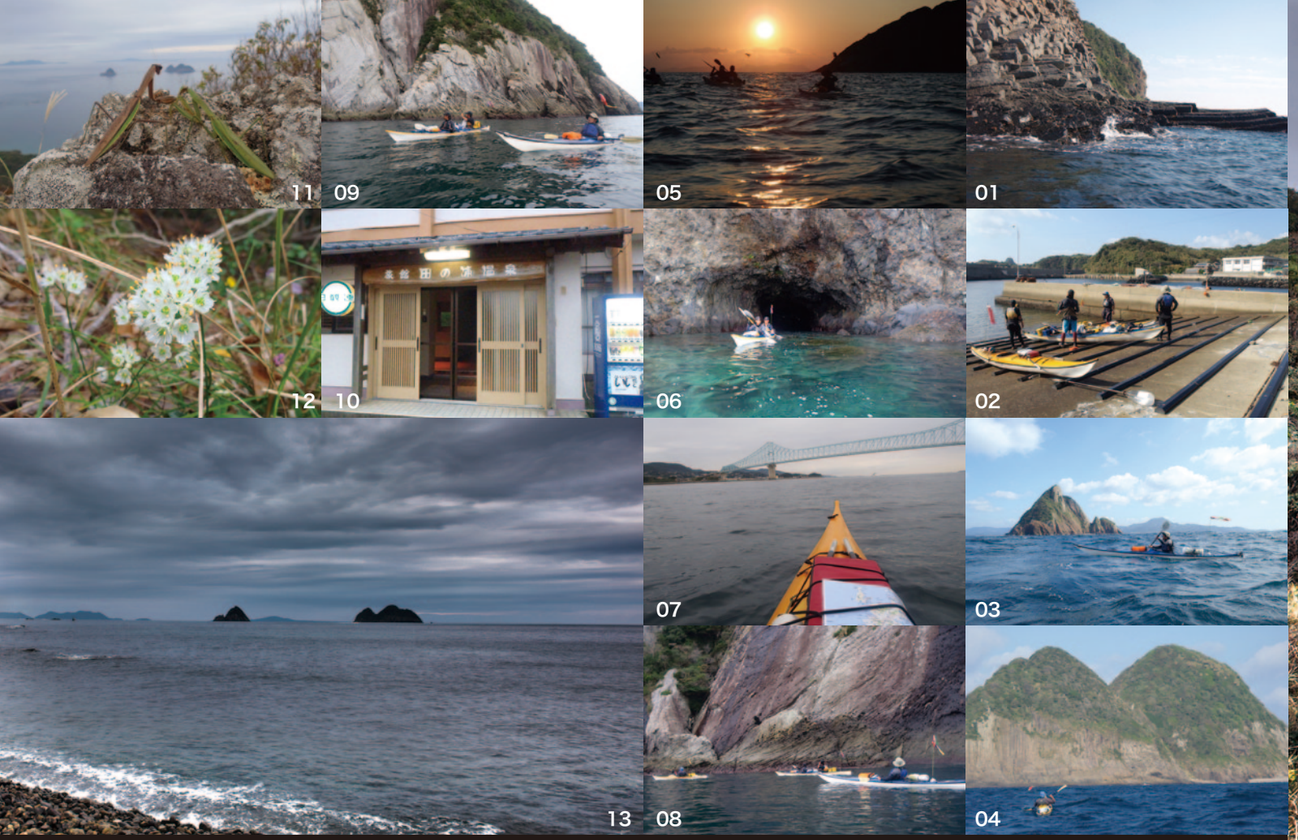
夕食は、小関が仕留め、さばいた猪と玉葱を丸ごと焼く。

さあこれから出発です。ブルーコーンの3名は、WKFのマリオンとホエールウオッチャー（2人艇）。ともにカーボン艇

【上段の野〜人津久・33㎞】

11月7日。平戸南部の志々岐山を目標に

天気もよく海況も安定していたため、予定外の行動で阿値賀島を目指した。阿値賀島は、上阿値賀島、下阿値賀島のふたつの無人島からなる。島の全域に原始林が残り、柱状節理による断崖絶壁が取り囲んでいることから、島の自然は原始性が保たれ、野鳥の楽園となっている。島自体が国の天然記念物（天然保護区域）に指定されている。



平戸島南部の西岸にそそり立つ礫岩 287m。 チョウセンノギク、イトラッキョウ、ミヤマビャクシンなど稀少な植物が豊富。国指定天然記念物。写真：中倉壮志朗

01 ｜平戸南部の宮之浦の海岸には、横方向に通常よりもかなり小さめの柱状節理の岩がある。平戸島でここだけだ。02 ｜平戸島南部の高島。太平洋戦争当時は軍の要塞となり、今も砲台跡が残っている。03 ｜下阿値賀島を漕ぐ小関。04 ｜上阿値賀島を漕ぐ小関。05 ｜２日目の幕営地である人津久の浜に到着したのは日が暮れてから。幕営地は個人所有で、地元へ了解をとった。06 ｜海蝕洞から出てくる林田と江藤。平戸島は、いくつかの海蝕洞があるが、シーカヤックで楽しめるものは少ない。07 ｜平戸島と生月島を結ぶ生月大橋。生月は、かって日本最大の捕鯨集団益富組があったことで有名。08 ｜平戸島西海岸の蓑坪ダム付近の海岸線２kmほどは、安山岩の断崖絶壁となっていて、平戸島で最も景観がよい。09 ｜ 11月９日、この時期に平戸島の西海岸がこれだけ穏やかなのは非常にまれだ。10 ｜田の浦温泉は、空海（弘法大師）が遣唐使船に乗り、唐に渡る途中に立ち寄り、金剛杖で湯を湧出させ、唐まで生死をともにした水であるとされている。11 ｜礫岩山頂のカマキリ。12 ｜イトラッキョは平戸島のみに自生する固有種。白のイトラッキョは珍しい。13 ｜平戸南西部の早福から望む上阿値賀島（右）と下阿値賀島。島自体が国指定天然記念物。写真：中倉壮志朗

さらに南下。これから先は山肌の崩壊が進み、安易に上陸できない海岸線が続く。また、このあたりから瀬渡し船も多くなり、その動きに注意が必要だ。２００８年７月、知床岬まで海岸線を歩いているときに、山肌が崩壊するのを見たことがある。そのうちこの海岸でも崩壊するのを見るかもしれない。上陸時には、くれぐれも山側に背を向けないように。要注意箇所だ。

平戸南端の尾上島灯台は、１９６６年、当時世界最大の太陽電池が設置された灯台として知られる。平戸島を周回する場合は、平戸南端、生月瀬戸、平戸瀬戸は、平戸瀬戸の転流表を参考にして通過時刻を決めておいたほうがよい。特に平戸南端の尾上島付近は複雑で激しい流れとなる。

高島に上陸して休憩。ここは5世帯の小さな漁村。ナンバーがついていない軽トラックが印象的だ。風は北北東４～５ｍ／秒だが、ここまで順調に漕げた。予定外だが阿値賀島を目指す。

阿値賀島は平戸南西部にある原始林が残る島で、国指定の天然記念物となっている。上阿値賀島にはオオミズナギドリ、カラスバト、アマツバメ、シマセンニュウが生息する。平戸島をシーカヤックで巡っていると多くの野鳥に出会う。野鳥観察には平戸島でのシーカヤックは最高だ。この日は予定外の行動と向かい風で日が落ちるまで残業を続け、人津久の海岸に幕営した。

【人津久～田の浦・24㎞】

11月8日。起床してから出発まで3時間。当然、起床する時間は夜明け前だ。海でも山でも同じだが、自分でも何が好きでこんなに早く起きて行動するのかと、たびたび思うことがある。しかし、安全のために早立ちは原則だ。

この日は、昨日の北東風も落ち着き、11月の西海岸とは思えないような凪となった。とても穏やかな生月大橋を越え、日頃からツアーで漕いでいる蓑坪ダムの海岸線をのんびりと進む。この付近は安山岩の断崖絶壁となっており、平戸島で最も景観がよい場所だ。

今日の幕営地に決めた平戸北端の田の浦を目指す。ここには、平戸カヤックス発足当時から手伝ってくれているスタッフの山口が、両親とともに温泉宿を営んでいる。料理が人気の一軒宿だ。田の浦温泉は、青年僧侶・空海（のちの弘法大師）が遣唐使として大陸へ渡る前に平戸に滞在した折、金剛杖にて地を突いて湧出したとの伝説がある。宿の空き地に幕営させていただき、弘法大師ゆかりの温泉で汗を流した。

【田の浦～鍔崎方面・往復３㎞】

11月9日。朝からとても風が強い。よりによって今日は平戸島最大の難所、鍔崎（つばさきと）を通過する日だ。かなり厳しいと判断しつつも、とりあえず出艇する。

この状態で誰か沈したら安全にレスキューできるかと考えながら漕ぎ続け、結局1.5㎞ほど漕いたところで撤退を決断する。全員が私の撤退の判断を待ち望んでいた様子だ。もっと早めの撤退、または停滞の決断をすべきだったかもしれない。遊漁船業を営んでいた宿のご主人から、「一番厳しい時間帯に出発したね。あと2時間もすれば落ち着くよ」と言われてしまった。

メンバーにあと2時間ほど待って再び出発することを告げたが、全員が今日までの日程のため、田の浦で今回の旅を終了することを望んだ。3日目に阿値賀島に寄らなければ、風であった昨日のうちに鍔崎を越え、平戸島一周も完結していたのにと、申し訳なく感じた。

みんな一周したかったと思うが、先ほどのパドリングがあまりに強烈で、集中力が切れたのかもしれない。残り16㎞だが、こんな時に無理しても、ろくなことはない。山口に平戸カヤックスまで送迎してもらい、カヤックを陸送し、今回のツーリングを終えた。

【田の浦～千里ケ浜・16㎞（特別編）】

今回漕ぐことができなかった、田の浦から千里ケ浜までを紹介しよう。最難関の鍔崎は、潮流と風がぶつかり合い、常に沖合いへ向かって扇状に三角波が広がっている。三角波を避けて沖合を漕ぐことを避け、波幅が狭い沿岸を一気に通過する。ほんの１００ｍ程度だ。ここは、カヤックに身体が馴染んだ最終日に通過したい箇所だ。

平戸港付近は、港を出るとすぐに潮流の影響がある。瀬戸は可能なかぎり転流時の通過を心がけたい。転流時でも、場所によっては常に潮が流れている。平戸瀬戸の平戸側を通過する場合は、満潮後の転流時のほうが、より潮流の影響は少ない。

干潮後の転流時の平戸大橋では漁船や大型船が頻繁に通過する。干潮時は引き波の影響が大きくなるので、船舶をやり過ごして、可能な限り沿岸を一気に通過する。注意が必要な部分は、ほんの１００ｍ程度だ。

【漕いだ軌跡を望む】

平戸島では５１４ｍの安満岳が主峰で、登山の対象としては志々岐山（３４７ｍ）が有名だ。平戸一周キャンプツーリングの最後は、参加者が自ら漕いだシーカヤックの航跡を平戸の山から望むことで完結する。１００㎞漕ぎ続けた海を眺め、感動し、達成感を味わってほしい。「車で行ける鯛ノ鼻」「10分程度歩くだけの川内峠」「トレッキングの上段の野」「軽登山の安満岳や志々岐山」「本格的登山の礫岩２８７ｍ」などがある。参加者の希望で場所を決定したい。

ここでは、２０１１年11月11日に登った礫岩を紹介する。この山は標高こそ低いが登山道が公になっておらず、道を知っている者か、ある程度の登山経験者のある者でなければ登ることができない。礫岩は、秋に平戸固有種のイトラッキョをはじめ、大陸性のダンギク、チョウセンノギクなどが咲く希少植物の豊富な山だ。この時は、佐世保のフリーペーパーの会長で、作家でもある小川氏と、プロカメラマンの中倉氏の3人で登った。3名とも趣味でもあり、仕事にもなる活動だ。

平戸カヤックスは、平戸一周のシーカヤックキャンプツアーを実施するために立ち上げたガイドサービスだ。しかし現実的には、体験的なガイドが大半を占めている。

非常勤のスタッフは、佐世保の「フリーダム」のガイドでもある堤を除く4名の若者全員が、平戸カヤックスを立ち上げてからシーカヤックガイドをはじめた者ばかりだ。そのために、他のガイドサービスとの合同で講習会を開催するなど、彼らの経験のために、さまざまな講習の機会を設けている。

彼らが副業的にシーカヤックガイドとして活動を続け、将来、平戸の子供達の中からひとりでも、シーカヤックで平戸の海を巡り、生業としてのシーカヤックガイドが育つことを目標に活動を続けていきたい。

2011年５月のイベント「シーカヤックで漕ぐスペックス（平戸）海峡」。オランダ貿易時代、初代商館長ジャック・スペックスにちなみ、平戸海峡を当時「スペックス・ストレート」と呼んでいた。写真：中倉壮志朗